

業者とも相談して、こちらから印刷工場に出かけ、植字工さんの傍で直接説明したり相談したりして活字、図表などを並べていった。活字が無かったり、思わしい書体の活字が見つからないということで、紹介状を貰って大阪の活字屋さんで活字買いに行ったこともある。そして時どき、分らない所や植字のややこしい所などがあると、「来てくれませんか」と電話がかかり、こちらも出かけていた。こんなことが何年間も続いて、紀要の体裁は次第に整い、数年前「これで大体できたようだ」と話し、奈良製としては上出来の紀要が印刷できるようになった。業者にとっては難しい学術誌の印刷の手本となり、注文取りの時の見本として本学の紀要が用いられる様になった。

植字工のOさんは若い時からこの道に入り、年期の入った六十才ぐらいの方で、「また紀要の季になりました」と何年間もおつきあひした。Oさんはちっちゃいルビ活字を、並べる時に倒れないように口でねぶりながらくっつけていたが、これで鉛毒に侵されないのかなど不思議であった。アメリカに嫁いだ娘さんの話などをしていた。機械工のSさんは親切な人だった。もう校了になっている活版を本刷機に取りつけて本刷をして、それを持って来て「遠慮なく活字の悪い所などしるしをつけてください」といって、悪い所をすべてさし替えたりして直してくれた。インクの濃淡まで意見を聞いて整えてくれた。

組版で苦労したのはT先生の論文で、これは長い英文の本文と、大抵のページに入れる数多くの図からなり、植字工さんがあまり英語に慣れていないので区切りが分らないし、図が指定の所になかなかはいらぬ。さっぱりはかどらないのに年度末も近く印刷を急がねばならない。そこでT先生の諒解を得て、直接組版現場に出かけて、そこで英文を適当に組み、図版をはめ込みやすいように切断したり、時には図版にドリルで孔を開けて活字を埋め込んだり苦心して、何日もかかって仕上げた。お蔭さまで今見ても良いものが出来たと思っている。それにしても、よくもあんなことを、と今さら思い出される。

今年の紀要は予算の関係などで、活字印刷や写植印刷でなく、タイプオフ印刷ということになっている。実は、写植印刷の昨年理科紀要を見て、その前の一昨年度までの活字印刷の紀要に比べて、余りにも見劣りするのに驚いたのであるが、「タイプオフ印刷にすると更に見劣りするでしょう」と業者はいう。大変気がかりなことである。

紀要は大学を代表する大切な表向きの顔である。間違っていないく読めればよいというのではなく、美しく、見やすく、品格も持たせたいものである。



覆 刻 本

赤 井 達 郎

さいきん、近世以前の書物の覆刻がさかんである。ここ数年のうちに本学の図書館に入ったものだけでも

日本古典文学館	ほるぷ出版
天理図書館善本叢書	八木書店
東急記念文庫善本叢刊	汲古書院
岩崎文庫貴重本叢刊	図書月版
版本文庫	図書刊行会

などの叢書類がある。まだまだほしいものは多く、ことに米山堂の稀書刊行本は是非そろえたいものである。

こうした近世以前の書物の覆刻は、いわゆる豪華本として売っていかうとする出版社の要求にもよろうが、それは単にその時代の雰囲気にもふれたいという懐古趣味や愛書趣味によるものだけでなく、文学や文学史の研究の側からの切実な要求によるものでもある。それはまだしも研究者の手に入りやすいように稀書刊行会本のような完全覆刻でなく洋装の写真版印刷という形をとっていることによってもうかがわれるところである。

いま、江戸時代の草子類を例にとって覆刻本の效用を考えてみよう。近世の文学は、毎見開きページに絵を入れ、その絵の空白の部分に文書を書きこむ黄表紙などはもちろん、ほとんどの書物に挿絵がつけられており、その絵と文章とは不可分の関係にある。いいかえれば、近世文学の多くは文字だけでは理解しえない文学なのである。いささか我が国に水を引くことを許されるなら、中世文学においても、物語僧や琵琶法師などによる「芸術的」な語り、絵巻や掛幅の絵をさしめしながら物語などを語る絵解法師といった文字以外の部分の理解が要求されるものだと思う。

文学につけられる絵はいっぱんに挿絵とよばれる。たしかにその通りではあるが、誤解をおそれずにいうならば、絵巻物の絵は挿絵ではなく、ほんらい絵に主体があつて、その詞書は絵の説明ともいべきものであり、わが国の文学における挿絵は室町時代末期からあらわれる奈良絵本にはじまる、といつてよさそうである。ともかく、挿絵は肉筆の奈良絵本から、筆彩版画である円縁本へ、さらに浮世草子、八文字屋などの劇書、草双紙、読本などその文学に応じたさまざまな形式・様式をとるものがあらわれる。そして、その挿絵は読む側にも、作る側にも、かなり高い関心がはらわれていたのである。

山東京伝は文化十年(1813)の『双蝶記』の序で次のようにのべている。

金鳥臨西舎 鼓声催短命
泉路無賓主 此夕誰家向

死にのぞみ 作りまし詩(ウタ)
思ひては ころ狂(タブ)るる

荒風(アラシ)吹け
地震(ナキ)ふるへかし

3

天淳名原瀛真人天皇(アメノヌナハラオキマヒト
ノスメロギ)の

いはけなき 三の皇子(ヒコミコ)
吾が弟(イロセ) 大津皇子
殯(モガ)りする 人すらなくて
耐へなくに 久しかりけむ
移葬(ハフリ)して 吾は魂(タマ)ふる
ははそばの 母のみことと
めぐし妃(ミメ) ともしあれば
霊(タマ)幸(チハ)へ 弟(イロセ)のみこと

うつそみの 人にある吾や
明日よりは ふたかみ山を
いろせと吾が見む

追記

万葉集(巻二)の大来皇女の詠六首を徑にし、持
統紀と懐風藻とを緯に配したたはむれのつずり織り。
たはむれついでに、上記の懐風藻の大津皇子の詩
を和訳しておきます。

日のひかり にしにかたぶき
ゆふ告ぐる つづみのおとは
いけの面を ながるごとき
ゆふやみに 消え入るごとき

ひめやかな つづみ聞くとき
ひとの世の あはれをおもひ
ひとりわれ よみぢあゆみき
あるじなく まれひともなき
死出のみち ひとりあゆみき



丸木のかけ橋

乾 邦 政

早いものでこの書想に直接関与させてもらうよう
になってから1年が過ぎました。いつも無理なお願

いをするやら、それだけでなく多くの方々から貴重
な時間を割いてのご寄稿に支えられて第22号を数え
ることができるようになりました。かずかずのご厚
意に深く感謝しています。

この書想が図書館報附録として、はじめて皆様方
の前にお目見えしたのは昭和49年3月のことでした。
その創刊号の冒頭に発刊のことばとして当時の図書
館長宮田明夫先生が次のような意味のことを述べて
おられます。

図書館報をすこしでも親しみやすいものに、そし
て諸先生と図書館とのささやかな交流の場にしたい。
愛読と協力と投稿とをお願いする。

この書想発刊の趣旨を受継いで私どもは、なんと
かして毎月1回は発行できるようにと努力を重ね、
原稿の足りないときには、定めしご迷惑であろうと
は十分に承知しながらも寄稿をお願いしてまいりま
した。おかげさまで、ときには一度に掲載しきれな
いほどのご寄稿をいただいたこともありましたが、
またときには、どうしても足りなくて苦しい思いをす
ること一再ならずございました。

本四橋のように、ばく大な工費をかけ、高度の技
術を駆使し、あまつさえ多くの業者の反対までもお
し切っかけてける橋、それにはそれの価値があるから
でしょうが、ここでは谷川のせせらぎにかけられた
丸木橋でよろしいのです。かわいくて風情があつて
手軽るで、渡るに通行料もいらず、大雨で流された
らまた架ける、これでよろしいのではないでしょ
うか。

ご専門にこだわらず、あくまでも気らくなものを
と願っています。ヤツと青眼に構えられたらお読み
になる方でも構えないではいられません。息苦しく
なってまいります。

学会や研究会の質疑応答でなく、円いテーブルを
囲んでの自由な放談雑談でよろしく、またその放談
や雑談の中に、よい意味でいつまでも心の底にほの
ぼのとした暖かみとして残るものが決して少なくあ
りません。これでよろしいのではないでしょう

四季折々、また何かのふしぶしに、見られたこと
感じられたことなどを気らくな気持ちで書いてお寄せ
いただく、それでこの書想発刊の趣旨に添うのでは
ないかと思うのです。

どうぞ今後もお変わりなく原稿をお寄せ下さいま
すようお願いいたします。

(附属図書館事務長)



投 稿 歓 迎

教職員のみなさんの原稿を募集しています。

◎ 字数 1,500字程度